
大家さんの事件簿

水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大家さんの事件簿

【Nコード】

N2972W

【作者名】

水月

【あらすじ】

祖母に頼まれ、アパートの大家さんをやることになってしまった主人公が事件に巻き込まれる！？

始まりと自己紹介（前書き）

ジャンルは推理となっておりますが、そうでもないかもしれません・・・。

始まりと自己紹介

「たのむよ〜あと1週間でいいんだ！だから、待っててくれないか？え、いやいや、追いつくなんて、そんな冷たいこと言わないでくれよな〜同じ人間だろ、な、大家さ……」

うるさい！！いいかげんだまれ、この家金滞納野郎！！……
・と、堪忍袋の緒が切れた私が怒鳴ると、ようやくこのオヤジも静かになった。と思つたら、急に泣き出した。仮にもいい大人、その上男なのに、だ。うん、これは嘘泣きだな。

「だって……大学をこの春卒業して、もう親のすねかじるわけにはいかない、って思つて家を出て、このアパート入居したんですよ」……さつきはオヤジと言つたが、この田中春人はまだ22歳である。

「そんで府中にある食品店に就職したはいいけど、1ヶ月前なんというか……潰れちゃったんですよ」それはお気の毒に。

「それから俺はコンビニのバイトとかで生計を立ててるんですよ！だからお願いしますよ！！1週間でいいから待ってください！」いやいや、こんなアパートの廊下のご真ん中で土下座されても。そして嘘くさい。

私は大きく息を吸い込んだ。

「私が高校生だからってなめないでよね！こつちだつて生活かかってんの！」

春人は驚いたように顔を上げた。

「……ああ、そついや亜樹ちゃん高校生だつたっけ」

「そついや」って何よ、「そついや」って！だいたい『ちゃん』付けで呼ばないでほしい。なれなれしいつたら！

高野亜樹、10月8日生まれの高校1年生。職業、東川アパートの大家。

もともと、このアパートはおばあちゃんのものだった。いまもそうだけど。両親が共働きだったものだから昼間はおばあちゃんが大家をやっているアパート、夜は自宅というようにこの2つを往復しながら小学生時代を過ごした。(ちなみにおばあちゃんはそのアパートで暮らしてもいた)

中学にあがると、さすがに1人でも平気だったからあまりアパートへ行くこともなくなった。ところが中学3年生、受験が終わり進学する高校も決まったころ。父の転勤が決まった。場所は大阪。東京からは遠すぎる。両親は仲がよかったから、母は今の仕事をやめて父について行くといった。亜樹はどうする？

散々迷ったが私は言った。ここに残る。せっかく努力して受かった高校だったから、どうしても行きたかったのだ。

両親には何回も説得されたが私が頑として動かなかったから最後にはあきらめたようだ。しかし、どこに住めばいいのか……3人で悩んでいたとき、おばあちゃんが作りすぎた肉じゃがを持ってやって来た。ことの次第を話すとおばあちゃんはからからと笑い出した。「何を悩んでんのさ？そんなら亜樹がうちにくればいっしょ」その一言で話は解決、2人は安心して大阪へ飛び立ちめでたしめでたし……とはならなかった。

3月の終わり、アパートで私が朝食の片づけをしていると、おばあちゃんが出かけるしたくを始めた。どうやら健康診断に行くらしい。「珍しいね」と言うと、「いやあ、103号室の山本さんにさそわれてねえ。」と言いながら出て行った。山本さんは1人暮らしをしている70歳くらいのおばあさんだ。山本さんに限らず、人のいいおばあちゃんはアパートの住民ほとんど仲がよかった。

西日が部屋に差し込むころ。私はだいぶ落ち着かなくなってきた。おばあちゃんがまだ帰ってこないのだ。もう出かけてから6時間以上たつてるのに……。そのときインターホンが鳴った。山本さんだ。あれ、おばあちゃんは？「大変だべさあ、亜樹ちゃん。はよう、病院へお行き」

それからのはよく覚えていない。やっとの思いで病院にたどりつくど、もうおばあちゃんは虫の息

「・・・・・・・・ではなかった。おばあちゃんは診察室にいて、私に気づくところ言った。「ひっかかっちまったよ」

おばあちゃんは胃がんだった。でも早期発見だったから手術すれば大丈夫らしい。入院の手続きを終え、やっと落ち着いたころ、おばあちゃんはいきなり私にこう言った。

「亜樹、すまねえがおばあちゃんの代わりに大家さんをやってくれないかねえ」

「・・・・・・・・「ええ!？」」

これが、私が大家をやっている理由。

始まりと自己紹介（後書き）

はじめまして。読んでくださってありがとうございます。

読みにくかったり、矛盾があったりすると思います……。

そんなときは指摘してやってください。

また、更新が遅れるかもしれません。

うまく書けるようこれからがんばるので、今後ともよろしくお願
いいたします。

プライドと推理問題

ピーンポーン……

かわいらしいインターホンの音で目が覚めた。

時刻、午前6時35分。

今日は土曜日だから学校はない。せつかくの眠りを……。私はぶつぶつ言いながらその辺に放り出してあった服に着替えた。それにしても誰がこんな時間に……。

「はい」と言いながらドアを開け、そこにいた人物を確認すると、バタンツと閉めてしまった。

「うわっ、なんで閉めるんだよ……。」「と外から情けない声が聞こえる。

細く開けたドアの隙間から見たのは、やっぱり情けない顔つきの田中春人だった。

「で、なんの用？」

本当は聞かなくても薄々わかっているのだが、意地悪を試みたい衝動に駆られて聞いてみた。

「もちろん」春人は自信満々に言った。

「家賃についてですよ」

正直、今は家賃なんかより早く布団にもぐりこむことのほうが大切だった。少なくとも、私にとっては。

それにここはアパートの廊下。少し冷えた秋の風が身にしみる。

「いつまでよ」あくびをかみ殺しつつたずねる。

「では2週間ほど……」

昨日より延びている気もするが、まあいい。

「んじゃあ」と部屋に戻ろうとしたら、春人が引きとめてきた。まだ何かあるのだろうか。

「ちょっと僕の部屋寄ってってよ。いいものがあるから」寝ぐせの

ついた髪を直そうともせず、にへらつと笑った。

春人の部屋は201号室。私の部屋のちょうど真上に当たる。部屋に足を踏み入れたとたん、啞然とした。部屋の中は乱雑した無数の本でいっぱいだったからだ。

私にもようやく大家としての自覚が芽生えてきたのか、思わず「床が抜けたりしないんでしょね」と怒鳴ってしまったぐらい。

「大学でミステリー同好会に入ってるさあ。亜樹ちゃんも推理小説好きなんだろ？ 気が合うなあ」

たしかにそんなことを言った記憶があるが、お前と気が合っても全然うれしくない！！

しかもミステリー同好会って……なんか胡散臭い。

「な……別にそんな怪しいわけじゃないんだよ。まあ、なんと言うか……ただ推理小説が好きな人の集まりってわけ」「そうなんだ……。で、いいものって？」

そうたずねると、春人はよくぞ聞いてくれたというようにうなずいた。

「で、たまに推理問題みたいなのを出し合ってるんだけど……」

「推理問題？」

「まあ……ちよつとした犯人当てや暗号とか」
そこで春人は困ったような顔になった。

「同好会には僕ら3年生が5人、2年生が2人、1年生が7人いるんだけど……」

4年生はそれどころじゃないってわけね。

「そこで1年生に問題を出されたんだけどね……それがその、あれでね」

なんか嫌な予感……。

「まさかわからなかったの？」

はつきりうなずく春人。

「解けとか言わないでよ？」

私が言葉を言い終わらないうちに春人はどこからか白い紙を引つ張り出してきた。

「お願いしますよ、俺にも先輩としてのプライドってもんがあるんだから」

その後輩とやらよりも私のほうが年下なんだけどなあ。

仕方なくひろげた紙にはワープロで印字してあった。

《謎のダイイングメッセージ》

僕は探偵シヨータ。今日の依頼は殺人事件の犯人を捕まえてほしい、とのこと。

場所はかなり大きな豪邸。

被害者は猫野三四郎、62歳。屋敷の主でもあり、大きな会社の社長でもある。

ワインのビンで何回も頭を殴られたらしく、顔は血まみれだった。

金持ちなだけあり、恨みを持つ人も大勢いる。

しかしなんとか死亡推定時刻やアリバイなどによって容疑者は3人に絞られた。

被害者の妻、猫野絹代。被害者とはあまり仲がよくなかったようだ。息子の猫野洋太。被害者と同じ会社に勤めていたが、金のことでもめていたらしい。

友人、木野明。なんでも被害者に莫大な借金を抱えていたとか。

しかも、被害者のそばには被害者自身の血で書かれた「十ノ三」の文字があった。

これはダイイングメッセージというものようだ。

「おや、このシミは？」僕は被害者が倒れていた絨毯を指さしてたずねた。ちょうど「ノ」と「3」の間にちよん、と短い線のような血がついている。

そばにいた刑事は不機嫌そうに「たまたま付いただけだろう」とぶ

つきらぼうに言った。

たまたま……なのだろうか。しかも、「十」の横画が他と比べて太いのも気になる。

そこで現場を仕切っていた和田警部が「で、この血文字の意味がわかったのかね」と皮肉っぽく聞いてきた。僕のような一般人に首を突っ込まれるのが不快なようだ。

僕は考えこんでいたが……。

「そうか！警部、この血文字は犯人を指しているんですよ！」
さて、犯人は誰なのだろうか？

文字はここで終わっていた。題名がかなりありきたりなのは気になつたけれど……。

「で、わかつた？」

春人がお茶をはこんできた。どうやら紅茶のよう。

「コーヒーは飲めなくてね」とのこと。

「ちゃんと考えたの？」

「一応」怪しい。

こういうのは被害者の気持ちになるのが一番だ。私はメモ帳とペンを持ってきてもらう。傍から見ればかなりおかしい光景だとは思つたが。

ダイイングメッセージを書いてみると。

「……あ」

「わかつた!？」と春人がのぞいてきたが……。

「だめ」私はメモ帳を隠す。「自分で考えないと」

春人がお菓子をおあずけされた子供のような目で見てきた。あー、その目はやめる、わかつたから。

私は説明を始めた。

……さて、犯人は誰だったのでしょう？

プライドと推理問題（後書き）

かなり遅くなってしまいました。

作中の問題は実際に書いてみてください！

結構ストレートです。

読んでくださって本当にありがとうございます！

解決と紅茶

「では、まずはじめに……」
今、私は春人を相手に推理問題の解説をしている。

「被害者は顔が血まみれになっていたのよね？……」
とはダイイングメッセージである。「十ノ三」を書いたときも、自分が書いた文字は見えていない。意識も朦朧としているだろうし」

「へえ……そっか……おい、ちゃんと聞いているのか？」

「じゃあ、はじめは『十』。横画が太い、ということは線を重ねた証拠……」

「つまりカタカナの『キ』ってことか！」私のセリフをとるなっ！
そして春人は「ああ！んじゃ犯人は妻の『キ又ヨ』！だろ？」

自信満々に言った後、口をぽかっとあけている私を見て春人は首をかしげる。

「……違うの？だって息子の猫野洋太は『キ』がつかないし、友人の木野明なら『キノ』だけで『3』はいらないし……」

「ばかあつ！そういつた消去法とか、はじめの一文字で犯人を決め付けたりしちゃだめなんだってば！これは謎解きのシーンのよ？そんなんじゃ読者は納得してくれないんだから……」

「ああ！犯人がわかれば残りの文字もわかるね！なんたって当てはめていくだけなんだから……」

「……本当に人の話聞いてないね。」

「次の文字の『ノ』と短い線は『又』か。1画目の横線がないのは大目に見ればいいのだろうか……。短い線つてのは2画目が1画目と交わらなかつたからかな。で、最後の『3』は『ヨ』が丸まってそう見えてしまっただけだろう」

勝手にペラペラと頭がこんがらがらがるような説明をしてから春人は満

足げにうなずいた。やれやれ、だ。

かなり無理がある（ような気がする）問題だったが、まあつまらなくはなかった。個人的な感想だけれど。

「よし、じゃあ明後日、早速報告にいくか！」あ、推理したの私だって忘れてんじゃないでしょうね。

すっかり冷めてしまった紅茶を飲みほすと、なぜか最後だけ甘い。今度からはちゃんと混ぜてほしいなあ。

そんなことを思いながら私は紅茶のお礼を言って春人の家を出て、自分の部屋へと歩いていった。

解決と紅茶（後書き）

今回は短くなりました・・・。。。
次こそは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2972w/>

大家さんの事件簿

2011年12月7日00時57分発行